

トルコ語サズル村方言のモダリティの体系
——共通トルコ語との対照——

Modality System of Turkish Sazli Village Dialect
— A Comparison of Standard Turkish —

ディリック セバル

DİRİK, Seval

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第45号 2018年3月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.45 2018

トルコ語サズル村方言のモダリティの体系 ——共通トルコ語との対照——

DİRİK, Seval

1. はじめに

文を構成する内容はその文が言及する実態を述べるだけでなく、話し手の態度やその実態に対する話し手の把握の仕方も含む。このような話し手の心的態度を表す文法的表現はモダリティと呼ばれ、言語によって様々な形態で表示される。トルコ語¹のモダリティ表現には次の3つがある。(1) 形態論的な手法によるもの (-mİş, -mAlI, -Abilなどの接辞)、(2) 分析的な手法によるもの (-mİş olmalı, -mAk lazım)、(3) 語彙的な手法によるもの (belki (たぶん)などのモーダル副詞)がある。形態論的な形式は動詞語幹に接辞を付加することによって成立する。それは欧米の言語学の規定によると動詞の屈折変化によって形成される形態論のカテゴリーに属するムードと呼ばれるものである。トルコ語のモダリティ形式は主に動詞の語形変化によって成立し、「ムード」として規定される範囲で捉えられているケースが多いが、その中で語彙的なモーダル要素により形成された複合的なパターンも多く存在する。共通語の例を挙げると、1の Ali orada (アリはあそこにいる) という名詞文の命題は断定の意味を示し、1(b,c)のようにモーダルの意味を表すコピュラマーカが接続されることによって推量、伝聞や推定などの意味が加わる。さらに1(d)のように文にモーダル副詞によりモダリティの意味を表すこともある。

1) a. Ali ora-da. (断定)

アリ あそこ-LOC (アリはあそこにいる)

b. Ali ora-da-dır. (推量)

アリ あそこ-LOC-GM (アリはあそこにいるだろう)

c. Ali ora-da-ymış. (伝聞・推定)

アリ あそこ-LOC-EV (アリはあそこにいるらしい)

d. Ali herhalde ora-da. (推測)

アリ たぶん あそこ-LOC (アリはたぶんあそこにいるだろう)

このようにトルコ語は様々なモダリティの表現手段を持つが、次のように方言のみに現れるモダリティを表す形式も存在する。これらの形式の用法は共通語では見られず、そのうちの -mAk vā 形式はモダリティとしての実態も知られていない。

¹ トルコ共和国のイスタンブール方言を指し、以下では「共通語」と表記する。

- 2) Di-me-di-m mi ben sâ. Ah, adam alzaymır hasta-sı
 言う-NEG-PST-1SG Q 私 あなた.DAT EXC 男 認知症 病気-3SG.POSS
 ol-dü-ndan, nere kit-ti-i-ni unut-uk.
 なる-PRT-CONJ どこ 行く-PRT-3SG.POSS-ACC 忘れる-PF/EV
 Eyi-ce tâla-la-n iç-i-ne iç-i-ne kit-mek vâ.
 いい-ADV 畑-PL-GEN 中-3SG.POSS-DAT 中-3SG.POSS-DAT 行く-INF ある
 Yol-u-nu gaypit-mek vâ.
 道-3SG.POSS-ACC 無くす-INF ある

(言ったじゃない、あなたに。男は認知症だったから、どこに行ったか忘れてに違いない。ど
 んどん畑の中を進んで行っただろう。道を迷ったかもしれない。)

チャナッカレ市アイヴァジュック町サズル村で話される方言（以下、「サズル村方言」と呼ぶ）
 には、ある根拠や痕跡に基づく推定を表す -IK²接辞や、存在表現 var の文法化によって生み出され
 た文末形式で、話し手の推測や想定などを表す -mAk vâ (-mAk var) という特有の述語形式が存在
 する (cf. Dirik 2016, Dirik and Kuribayashi 2015)。

共通語のモダリティ体系において認識的モダリティの表現手段には形態論的、分析的、語彙的な
 手法があることを述べたが、サズル村方言もこれらの三つの手法によって表現される。一方、共通
 語と大きく異なるのは、-mAk vâ と -IK という述語形式を用いて幅広い意味内容を表現する点で
 ある。トルコ語の方言研究が盛んになっている中、方言と共通語の文法要素の関係についての研究は
 未だに不十分であり、特にチャナッカレ方言（サズル村方言もこれに含まれる）の文法的な要素に
 関する研究は不十分である (cf. Bulut 2013, Karahan 2011)。

そこで本研究ではサズル村方言を対象にし、その方言における固有のモーダル要素について体系
 的な研究を行う。本研究の目的は具体的に次の三つである。1) 共通語のモダリティ体系を分析し、
 カテゴリー化を行う。2) サズル村方言の記述データを示し、方言特有の形式のモダリティ
 としての意味内容を明らかにする。-mAk vâ は認識的モダリティ、-IK は認識的及び証拠的モダリ
 ティの表示形式であることを明示し、位置づけを行う。3) 共通語のモダリティ体系に対し、方言
 の体系はどうなっているのかを考察し、明らかにする。これらの研究目的を達成するために研究方
 法としてサズル村方言の現地調査によるデータ³を利用し、意味分析を行う。

² トルコ語は母音調和があるため、動詞語幹に付く -IK 接辞は -ik, -ık, -ük, -uk の異形態に変化する場合がある。

³ 本論の方言データはサズル村で40代から70代までの村民から収録したものである。

2. 先行研究

Palmer (2001) は言語類型論的な観点からモダリティについて体系的な分類を行い、モダリティを *realis* (現実的な出来事) と *irrealis* (非現実的な出来事) という二分立の立場から考察し、文法的な表現手段が用いられるムードと補助動詞などの語彙的な手段を持つモーダルシステムから成立するとしている。さらにモダリティを命題的と事象的という二つの形式に分け、基本的な全体像を次のように組み立てる。命題的モダリティは認識的と証拠的、事象的モダリティは拘束的と動的といった下位分類を成す。それぞれの下位分類を示したモダリティ体系は以下の表1の通りである (Palmer 2001:22) ⁴。

表1 Palmer (2001) によるモダリティの分類

命題的モダリティ (Propositional Modality)		事象的モダリティ (Event Modality)	
認識的 (Epistemic)	証拠的 (Evidential)	拘束的 (Deontic)	動的 (Dynamic)
推測 (Speculative)	報告的 (Reported)	許可 (Permissive)	能力 (Ablitive)
推定 (Deductive)	感覚的 (Sensory:	義務 (Obligative)	意志 (Volitive)
想定 (Assumptive)	Visual, non-Visual, Auditory)	確約 (Commissive)	

命題的モダリティ (Propositional modality) は話し手の命題の事実や陳述に対する客観的な態度である。一方、事象的モダリティ (Event Modality) は実際に起こっていないが起こる可能性のある出来事を表す。認識的モダリティ (Epistemic modality) は不確実な推測や推量を表す「推測 (Speculative)」、目撃した証拠からの推論を表す「推定 (Deductive)」と、一般的な判断からの推論を表す「想定・仮定 (Assumptive)」という3種類がある。証拠的モダリティ (Evidential modality) は話し手の命題の真実に対する証拠性を表し、基本的に報告的なもの (Reported) あるいは伝聞と五感の感覚によるもの (Sensory) という二つがある。拘束的モダリティ (Deontic Modality) は話し手の許可 (Permissive) や義務 (Obligative) や必ず実行する約束 (Commissive) を表す。動的モダリティ (Dynamic Modality) は構文内の発話者の能力 (Ablitive) や意志 (Volitive) によってその行動を行うことを示す。能力は発話者の実際の能力を表す場合もあるのに対して、主体がある行為をすることを可能にしたり不可能にしたりする一般的な状況として解釈される場合もある。さらに、命令 (Imperative) もこの題目の下で取り扱われる。なお、Palmer (2001) によると同様の形態が異なった意味のモダリティを表しうる。つまり、モダリティ表現には多義性が見られる。

⁴ Palmer (2001) で用いられたモダリティの用語の日本語訳は風間 (2011) を参考にして記述したものである。

3. トルコ語のモダリティ

トルコ語は膠着型言語であるため、動詞語幹に接尾辞を付加した語形変化によってモダリティを表示する場合が多くある。そのため、トルコ語のモダリティは主にムードとして取り扱われる (cf. Kornfilt 1997)。Kerimoğlu (2011) によると、伝統的な研究ではムードとモダリティの区別について述べられておらず、すべてがテンス形式の元でムードとして取り扱われ、ムードはモダリティの意味を表示する文法的な手段として、ムードとモダリティを区別した上でトルコ語のモダリティについて考察すべきであるとされる (Kerimoğlu 2011:157)。さらに Ergin (2013:289) と Hengirmen (2007:234) はトルコ語のモダリティを命題的なものと事象的なものに分類し、命題的なモダリティが特に時制マーカーによって表示されるため、時制を命題的モダリティの中に位置づける。モーダルな意味のみを表すマーカーが事象的なモダリティとして取り扱われる。Ergin (2013:289) によると事象的なモダリティは時間との結びつきが無く、命令、意志、可能、義務などの意味を表すモーダルな側面のみを表示する形式だと指摘している。これらの先行研究を踏まえた上で、トルコ語のモダリティを体系的に分類するのに Palmer (2001) の分類は最も適していると思われるので、その分類をもとにトルコ語のモダリティ体系を考察する (cf. Kerimoğlu 2011)。

3.1. 命題的モダリティ

Palmer (2001) では命題的モダリティとは命題の真偽に対する話し手の態度を表し、認識的なものと証拠的なものに分類されている。トルコ語のモダリティもこの分類に収められ、認識的モダリティの表現手段は、形態論的な手法と分析的な手法であり、証拠的モダリティの場合、形態論的な手法のみである。それぞれの表現手段による表示内容について以下で説明する。

3.1.1. 認識的モダリティ

トルコ語の認識的モダリティは形態論的および分析的な表現手段を持ち、様々な表示マーカーによって表現される。例えば、中立形と呼ばれる -Ar、現在進行形の -(I)yor、未来形接辞の -(y)AcAk と Generalizing Modality と呼ばれる -DIr などの接辞が使用される。以下では該当する表現に下線部を付す。

3) Mehmet geç gel-ir. (想定)

メフメット 遅い 来る -AOR

(メフメットは遅来るだろう)

(Göksel and Kerslake 2005:343)

4) Ayşe gel-iyor, ayak ses-ler-i-nden belli. (推定)

アイシエ 来る -PROG 足音 -PL-3.SG.POSS-ABL 明らか

(アイシエが来ているよ。足音からわかる。)

- 5) Sus artık. Çok konuşuyor-sun. Öğretmen kız-acak. (想定)

黙れ もう たくさん 話す-PROG-2SG 先生 怒る-FUT

(もう黙って。あなたは話しすぎ。先生が怒るよ。)

-Dirは客観的な事柄や出来事等を示し、基本的に断定を表す。一方、テンス・アスペクトマーカーと共起すると、話し手の予想、希望、想定等を表示することとなる。

- 6) Taro san-a telefon ed-ecek-tir. (想定)

太郎 あなた-DAT 電話 する-FUT-GM

(太郎はあなたに電話するだろう。)

また、分析的な手段によるモーダル形式では動詞に-mış, -(I)yor, -(y)AcAkなどの接辞を付加したものと補助動詞ol-(なる)による複合的なパターンによるものがある。例えば、-miş ol-malı / -(I)yor ol-malı という組み合わせによって推定の意味が表出される。

- 7) Kayseri'yi gör-müş ol-malı-yım ama hiç hatırla-mı-yor-um.

カイセリ市-ACC見る-PF.GERなる-OBL-1SG でも 全然 覚える-NEG-PROG-1SG

(カイセリ市を見たはずなのだが全然覚えていない。) (Göksel and Kerslake 2005: 365)

-miş/-(I)yor ol-acak、-miş ol-urの組み合わせはモーダルとして想定の意味を表す。

- 8) (Herhalde) Park-ta içki iç-iyor ol-acak-lar.

おそらく 公園-LOC お酒 飲む-PROG.GER なる-FUT-3PL

((おそらく) 公園でお酒を飲んでいるだろう。)

-miş/-(I)yor ol-sa gerekのパターンは推定の意味を表すモダリティ形式である。

- 9) Rapor-un anlaşılır ol-muş. Çok çalış-mış ol-sa-n gerek

レポート-2SG 分かりやすい なる-PF/EV. たくさん 勉強する-PF なる-COND-2SG 必要

(あなたのレポートはとても分かりやすくなりました。たくさん勉強したのでしょうか。)

-miş/-(I)yor ol-abil-irは話し手の推測を表すモーダル要素として成り立つ。

- 10) Ayşe bu fotoğraf-ı Hatice'ye göster-miş ol-abil-ir.

アイシェ この 写真-ACC ハティジェ-DAT 見せる-PF.GER なる-PSB-AOR

(アイシェはこの写真をハティジェに見せたかもしれない。) (Göksel and Kerslake 2005: 365)

最後に認識のモダリティは語彙的な手段を用いることもある。名詞述語文や動詞述語文に文副詞や感嘆詞を付加するという方法でモダリティを成立させるのである。さらに、イントネーションもモダリティを示す手段の一つであり、特に問いかけの場合、頻繁に用いられる。

- 11) Belki Ayşe de ev-de. (推測)

たぶん アイシェ も 家-LOC

(たぶんアイシェも家にいる。)

3.1.2. 証拠的モダリティ

証拠的モダリティは表現手段が形態論的のみであり基本的に定過去の-DIと不定過去の-mİş/-(y)mİşの二つのマーカーを持つ。証拠的モダリティはエヴィデンシャルリティとも知られており、トルコ語の中でも非常に大切な表現手段の一つである。

エヴィデンシャルリティとは情報の源を表す言語カテゴリーである (Aikhenvald 2004:3)。エヴィデンシャルリティのタイプは伝聞、推定、目撃か非目撃か、直接的か間接的かなどのようによりいろいろな知覚によるものがある。また、エヴィデンシャルリティを明示するその証拠 (エヴィデンス) が視覚、聴覚、嗅覚、味覚などによる場合もある。Palmer (2001) ではエヴィデンシャルリティが認識的モダリティの下位分類としてモダリティに含まれているが、Aikhenvald (2004) では独立したカテゴリーとして捉えられる。Aikhenvald (2004) はエヴィデンシャルリティを認識的モダリティと異なるものとして捉え、モダリティ、テンスやアスペクトなどの下位分類ではないことを指摘している。トルコ語のモダリティ研究ではエヴィデンシャルリティがモダリティのもとで考察されるため、本論ではエヴィデンシャルリティという単独のカテゴリーではなく、モダリティの一種として証拠的モダリティあるいはエヴィデンシャルリティとして捉える (cf. Aksu-Koç 1988, Kerimoğlu 2011)。

定過去と呼ばれる-DIはテンスとしては過去を表し、同時に話し手の体験や目撃によることも表す。その意味で命題的モダリティの一つとして取り扱われ、話し手の直接体験という認識の仕方と結び付いている。そのため証拠的モダリティの中では感覚的モダリティを表示すると言える。また、不定過去の-mİşはテンス・アスペクトとしては出来事の完了を表し、過去の意味を含むが、接辞は過去に起こった出来事を何らかの方法で間接的に入手し、それを伝達するか、推論するかというエヴィデンシャルリティの意味を中心にしている。それゆえテンスやアスペクトの意味とは大きく異なるが、その特徴からも全く切り離されることがない。コピュラマーカーのimiş/-(y)mİşだけはテンスとアスペクトの意味を表さず、モダリティのみを明示する (cf. Uzun 1998, Kerimoğlu 2011, 林 2013など)。

12) Adam at-tan düş-tü.

男 馬-ABL 落ちる-PST/EV

(男は馬から落ちた (私は見た))

13) Adam at-tan düş-müş.

男 馬-ABL 落ちる-PF/EV

解釈1) 男は馬から落ちたらしい。(推定)

解釈2) 男は馬から落ちたそうだ。(報告的 (伝聞))

解釈3) 男は馬から落ちたんだ。(Mirativity)

以下の例14は伝聞で明示される間接的なエヴィデンシャルリティを表すものである。

14) a. Bahçe-ye bir meşe ağaç-ı dik-ti-m.

庭-DAT 一つ オーク 木-ACC 植える -PST-1SG

(庭に一本のオークの木を植えた。)

b. Ali bahçe-si-ne bir meşe ağaç-ı dik-miş.

アリ 庭-3SG.POSS-DAT 一つ オーク 木-3SG.POSS 植える -EV/PF

(アリは庭にオークの木を植えたらしい。)

c. Sen bir meşe ağaç-ı dik-miş-sin, ban-a göster-sene.

あなた 一本 オーク 木-ACC 植える -EV/PF-2SG 私-DAT 見せる -IMP

(あなたはオークの木を植えたらしいね、私に見せてくれる?) (Göksel and Kerslake 2005:356)

コピュラマーカの-(y)mış/imişは動詞語幹に膠着した他のテンス・アスペクトマーカと共起し、名詞や形容詞などに付加される。伝聞、推定などのモダリティのみの解釈を成す。

15) Ali çok yakışıklı-ymış. Ve bekar ol-abil-ir-miş. (伝聞)

アリ とても ハンサム -EV.COP そして 独身 なる -PSB-AOR-EV.COP

(アリはとてもハンサムだそうだ。そして独身だそうだ。)

さらに、ある出来事を実際のことのよう仮定するときにもエヴィデンシャルリティが表示される。

例16は子供のままごとで、役を決める場面である。

16) Şimdi sen doktor-muş-sun, ben de hemşire-ymiş-im.

今 あなた 医者 -EV.COP-2SG 私 も 看護婦 -2SG.POSS-EV.COP-1SG

(今、あなたはお医者さん、私は看護婦としよう。)

また、明らかな痕跡に基づいて推定するときも同じ形式でエヴィデンシャルリティを表す。例えば、例17では、まだ本人と会っていないのに、靴が玄関にあるのを見て、Muratが家に来たかと推定する。家に来たかどうかについて話し手には知識がないが、靴の存在だけに基づいて例17を発言する。

17) Murat gel-miş.

ムラット 来る -EV/PF

(ムラットは来たそうだ)

エヴィデンシャルリティは一人称主語の場合、表現できない (Aikhenvald 2004:8)。しかし、トルコ語では一人称主語でもエヴィデンシャルリティの表現が可能である。以下例18では話し手が気づかないうちに行った行為に対して、無意識にやってしまったということを表す。

18) Kitab-ı-ı yanlışlıkla boya-mış-ım.

本-2SG.POSS-ACC 間違っ て 色を塗る -PF/EV-1SG

(あなたの本に間違っ て染みをつけてしまったみたい。)

さらに、話し手自身がどこかから自分についての話を聞いて、自分についてのその情報を全く信じていない場合、一人称主語でもエヴィデンシャルリティを表すことができる。

- 19) *Güya, ben herkes-le kavga-lı-yımış-ım. Hep yalan söylü-yor-muş-um.*
 まるで 私 みんな-COM けんか-ADJ-EV.COP-1SG いつも 嘘 言う-PROG-EV.COP-1SG
 (まるで、私はみんなとけんかしているみたいだ。いつも嘘を付いているみたいだ)

また、視覚以外の感覚もエヴィンシャリティを明示する。

- 20) *Birisi balık pişir-miş.* (匂いを感じてから発言する) <嗅覚>
 誰か 魚 炒める-PF/EV
 (誰か魚を炒めたらしい。)

また、エヴィデンシャリティは疑問文でも明示されることがある。それは聞き手が出来事に関して持っている情報を尋ねる場合の質問である。

- 21) *Ata Bey'in keyf-i nasıl-mış? Yoksa hala kız-gın-mış mı?*
 アタ さん-GEN 機嫌-3SG.POSS どう-EV.COP または まだ 怒る-ADJ-EV.COP Q
 (アタさんの機嫌はどうだろう。あるいはまだ怒っているの。)

以上、共通語の証拠的モダリティには上記に示したように直接経験したものを指す-DIと間接的に入手した情報の伝達や明らかな根拠を元にした推定を表す-mİş/-(y)mİşの二つがある。

3.1.2.1. 意外性 (ミラティヴィティ/Mirativity)

間接的エヴィデンシャリティが更に文法化を進めて<話し手の意外性(驚き)>を表すようになる(工藤2006:110)。この現象はトルコ語にも見られ、-mİş/-(y)mİşによって表示される。

例えば例22では誰かがドアを開けたのを聞いて、玄関に出てみると、来ないと思っていたAliだった。このことでびっくりする、あるいは喜ぶというような感情的な反応を見せている。

- 22) *Aa, Ali gel-miş.*
 あら、アリ 来る-PF/MIR
 (あら、アリが来たんだね。)

例23では長い間会っていない友達と偶然出会った時に驚きも含めた感情的な表現をしている。

- 23) *Kim-ler var-mış bura-da. Bu ne güzel sürpriz.*
 誰-PL いる-MIR ここ-LOC これ 何 奇麗 サプライズ
 (ここにだれがいるの。これは何て素敵なサプライズだろう。)

3.2. 事象的モダリティ

モーダルな意味のみ表すモーダルマーカは基本的に事象的モダリティを表すものである。例えば可能を表示するモーダルマーカの-(y)Abilは単独で動詞に付加されず、必ずテンス・アスペクトマーカと共に起る。可能の表現はDeontic PossibilityやDynamic Possibilityを成立させ、可能の他に許可や能力の意味を表す。例24と25から分かるように「-(y)Abil+Ar」や「-(y)Abil+Iyor」な

どの形式で、許可や可能の意味を表出する。

- 24) Bura-ya otur-abil-ir-siniz. (許可: Deontic Possibility)

ここ-DAT 座る-PSB-AOR-2PL

(ここに座ってもいいですよ。)

- 25) Araba kullan-abil-iyor-um. (能力: Dynamic Possibility)

車 使う-PSB-PROG-1SG

(車を運転できます。)

さらに-mAll、-A、-sAというモーダルの意味のみを表す接辞がある。それぞれの用法と機能は以下の通りである。

a) -mAllは基本的に義務を表す形式である。

- 26) Anne-n-e yardım et -meli -sin. (義務)

母-2SG.POSS-DAT 手伝い する-OBL-2SG

(あなたはお母さんを手伝わなければなりません。)

b) 接辞の-Aは話し手の願望を示す述語を形成する。

- 27) Sen bura-ya gel-e-sin. (願望 Optative)

あなた ここ-DAT 来る-OPT-2SG

(あなたにここへ来てほしい。)

c) 接辞の-(y)Allmでできた述語は聞き手と話し手の両方が含まれる願望表現である。

- 28) Haydi, dondurma al-alım. (願望 Optative)

じゃあ アイスクリーム 買う-OPT

(じゃあ、アイスクリーム買おう。)

d) モーダル接辞の-sAは仮定および話し手の願望を表す。

- 29) Bu akşam güzel bir film seyret-se-k. (願望・仮定)

この 夕方 奇麗 一 映画 見る-COND-1PL

(今夜、おもしろい映画が見れたらいいのに。)

そして、-mA/-mAk (名詞化) + lazım (必要) / gerek (必要) / şart (義務) という形で、話し手が聞き手にしなければならないことを伝える義務性を表す。

- 30) Ev-e erken git-mek lazım. (義務 Obligative)

家-DAT 早い 行く-INF 必要

(家に早く行かなければならない。)

このようにトルコ語の事象のモダリティは、モダリティの意味のみを持つ接辞やモーダル接辞と-(I)yorや-Arなど接辞との組み合わせによる形態論的な手法、および名詞化接辞-mAk/-mAと lazım (必要) / gerek (必要) / şart (義務) などの組み合わせによる分析的手法で表されている。

4. トルコ語のサズル村方言におけるモダリティ

共通語のモダリティ体系及びその表現手段について上記で述べた。本節以降、本論の研究対象となるチャナッカレ県アイヴァジュック町サズル村の方言について記述していく。まず、体系に関して、内容的な側面から見ると共通語とほぼ同様の形態を持っていると言える。Palmer (2001) による分類を基に方言のモダリティの内容も共通語と同様に示すことができる。

一方、表現手段を見るとサズル村方言は共通語のモダリティ表現と大きく異なるいくつかの表示形式を持っている。話し手の真の気持ちを表現するに当たって用いる命題的モダリティの中で、共通語の表現手段にさらなる表現が用いられる。それは、述語形式の-İKと-mAk vāである。例31の下線部分で示すように-İKは明らかな痕跡に基づいて話し手の確実な推定を表す点で証拠的モダリティと認識的モダリティをあらわす。認識的なモダリティを表していることは、話し手の様々な痕跡に基づいてなされた推定は真である可能性が高いという確実性を示すことからうかがえる。

31) Aşâ tâla-da yangın çık-mış. Bak bu adam kayıp diyo-lâ.

下 土-LOC 火事 出る-EV 見ろ この 男 行方不明 言う-3PL

Nerê kit-tî-ni bil-me-yo-lâ emme muhakkak bu adam ur-lâ-da gez-di.

どこ 行く -PRT-ACC 知る -NEG-PROG-3PL でも 絶対 この 男 あそこ -PL-LOC 歩き回る -PST
gece soğuk-tan üşü-yünce de, bi ateş yak-tı

夜 寒さ-ABL 冷える-CV も 一つ 火 つける -PST-3SG

Bak bu yangın-ı u çıkâr-ık.

みろ これ 火事-ACC 彼 出す -PF/EV

Yösa bu mevsim-de kim kit-çek ur-lâ-da da ateş yak-çak.

でなければ この 季節-LOC だれ 行く あそこ -PL-LOC も 火 つける -FUT

(下の土地で火事があったようだ。この男は行方不明と言われているの。どこに行ったのか誰も知らないが、絶対この人はあそこで歩き回っていた。夜寒くて冷えたから、火をつけた。ほら見て、この火事を起こしたのはその人だよ。でなければこの季節に誰があそこに行って、火をつけるの。)

32) Sera dël üzüm. Üzüm-lê-n üst-ü ört-ül-ük.

温室 NEG.COPぶどう ぶどう -PL-GEN 上-3SG.POSS 被せる -PASS-PF

Ova hep üzüm. Gaşı yaka da üzüm ô-mak vâ.

平野 全て ぶどう 向こう 側 も ぶどう なる -INF ある

((野菜の)温室じゃない、ぶどうだ。ぶどうの上に被せられている。平野全体はぶどうだ。向こう側もぶどうだろう。)

例32の-mAk vāの述語形式は存在表現「vā/var」の文法化によって生み出された表現形式であり、動詞の不定形(infinitive)「-mAk」に存在表現「var」が付加された結果、存在の意味がなくなり、方言では話し手の推量・推定等のモーダルの意味が表出され、認識的モダリティを表現する。この

ような用法は共通語に認められておらず、意味も通じない。

4.1. サズル村方言の認知的モダリティ

サズル村方言には共通語と異なる -IK と -mAk vā (-mAk var) という二つの形式があると上述した。前者は場合によって認知的モダリティと証拠的モダリティの両方を表現するのに対して、後者は主に認知的モダリティのマーカースとして用いられる。

なお、以下では方言における推測 (Speculative)、推定 (Deductive)、想定・仮定 (Assumptive) のそれぞれの形式について述べたい。

4.1.1. 推測の表現 (Speculative)

推測を表すマーカースとして、共通語では -(y)AcAk, -Ar, -DIr, -mİş ol-abil-ir / -(I)yor ol-abil-ir などの接辞と分析的な表現形式がある。方言の -mAk vā 形式はこれらの形式と置き換え可能であるため、方言話者によって -mAk vā 単独で共通語にあるそれぞれのマーカースの意味を表すことができる。例えば、前述の例10, 11はサズル村方言の場合 -mAk vā 形式に置き換え可能であり⁵、意味としても共通語とほぼ同じものを表す。以下の例の a は共通語、b は方言の推測表現である。

- 33) a. Ayşe bu fotoğrafı Hatice'-ye göster-miş ol-abil-ir.
 アイシェ この写真-ACC ハティジェ-DAT 見せる-PF.GER なる-PSB-AOR
 (アイシェはこの写真をハティジェに見せたかもしれない。) (Göksel and Kerslake 2005: 365)
- b. Ayşe bu fotoğrafı Hatice'-ye göster-mek vā.
 アイシェ この写真-ACC ハティジェ-DAT 見せる-INF ある
 (アイシェはこの写真をハティジェに見せたかもしれない。)
- 34) a. Belki Ayşe de ev-de.
 たぶん アイシェ も 家-LOC
 (たぶんアイシェも家にいる。)
- b. Ayşe de ev-de ō-mak vā.
 アイシェ も 家-LOC なる-INF ある
 (アイシェも家にいるかもしれない。)
- 35) a. Muhtemelen Ayşe biz-im-le gel-mi-yor. (共通語)
 おそらく アイシェ 私たち-COM 来る-NEG-PROG
 (おそらくアイシェは私たちと来ない。)

⁵ 例 33、34、35および以下の例39、50、51 はサズル村在住の方言話者 (女性52歳) から文法的であると判断を得た作例である。

b. Ayşe biz-im-le gel-me-mek vâ. (方言)

アイシェ 私たち-COM 来る-NEG-INF ある

(おそらくアイシェは私たちと来ない。)

例34と35では-mAk vâによって推測の意味が表されるが、共通語の原文といくぶん異なる。例34(b)と35(b)では話し手自身の推量を強調し、「muhtemelen (おそらく)」と「belki (たぶん)」というモーダル副詞は不要となる。なぜなら、-mAk vâの述語形式は「おそらく」や「たぶん」などの疑いを示すようなモーダルの表現を単独で意味内容に含んでいるからである。なお、-mAk vâは単なる推量形式として主に用いられるが、可能性も表す場合がある。既得の情報を想像や思考によって処理し、その情報を不確かなものとして捉え、話し手の単なる推量及びその推量に対する可能性を表す。例えば、例36では下線で示す構文は話し手が聞いた情報を想像によって処理し、不確かな推量とその可能性を表す。つまり推測の表現である。一方、下線のない-mAk vâ表現では、聞いた情報を目で見て、確かめてから、その情報を根拠に推定をする。このように同じ表示形式で幅広いモダリティのタイプが表現できる。

36) Nē-den gel-di u ses? Çocuk-lar-a bağır-mak vâ.

どこ-ABL 来る-PST あの 声 子供-PL-DAT 叱る-INF ある

İskele-nin üst-ü-nde-lē. Dada-lar-a çekiş-mek vâ.

棧橋-GEN 上-3SG.POSS-LOC-3PL 子供-PL-DAT 怒る-INF ある。

(海辺から声が聞こえる。) あの声はどこから聞こえるの。(誰かが) 子供たちを叱っているかもしれない。(彼らは) 棧橋の上にいる。子供たちに怒っているらしい。 (Dirik 2016:119)

例37では話し手は向こうから来ている人を窓から見ながら発話する。来る人の服装がAyşeの服に似ている、話し手はAyşeが来るという知識を持っているなどの情報を利用し、来る人のことをアイシェと思って、推測する。

37) Karşıdan Ayşe gel-mek vâ.

向こうから アイシェ 来る-INF ある

(向こうからアイシェが来ているようだ。)

例38は、話し手に「Vehbiはどこですか」という尋ねたとき、いろいろな状況をもとに未知の実態が推量される場面である。

38) ...İçeri gir-ik gâlba bak. İçē-de mi Vehbi?

中 入る-PF/EV たぶん 見ろ 中-LOC Q ヴェフビ ?

(ご覧。たぶん(部屋の)中に入ったらしい。Vehbiは部屋の中にいるの?)

İçē-de de yok-muş bak. Deniz-de ō-mak vâ, u zaman.

中-LOC も いない-EV.COP 見ろ 海-LOC なる-INF ある そうしたら

(ほら、ご覧。部屋の中にもいないみたいだよ。そうしたら、海にいるかもしれない。)

E içē-de yok di-di-ye ana-n. Deniz-e kit-mek vā işte.
 EXC 中-LOC いない 言う-PST-EXC 母-2SG.POSS 海-DAT 行く-INF ある EXC
 (お母さんは部屋にいないと言っただろう。ほら、海に行ったかもしれない。)

Valla bil-me-yo-m. Erhan abe-n-lē de deniz-e gir-iyō bak.
 本当 知る-NEG-PROG-1SG エルハン 兄-2SG-PL も 海-DAT 入る-PROG 見る
 (本当に知らない。ほら、ご覧、エルハン兄さんも海に入っているよ) (Dirik 2016:119)

例38では denizde ömak vā (海にいるかもしれない) と denize kitmek vā (海に行ったかもしれない) という二つの形式があるが、前者は話し手の知覚に基づいて海にいる可能性があるという認識を表すのに対して、後者では直感的な判断や臆測を表示し、自分の考えを強く言っている。

以上、サズル村方言のデータから話し手の単純な推量や可能性を表す時には、主に上記の -mAk vā が用いられると言える。

4.1.2. 推定の表現 (Deductive)

話し手が目撃した証拠やそこから判断した内容と推論は、方言では共通語と異なり、主に述語形式の mAk vā と -IK によって表現される。例えば、雨が降っている音を聞いて、それを根拠に「今雨が降っているだろう」と推定するとき、共通語では以下の例39(a)のように表現するのに対して、方言では例39(b)の表現を用いる。両方とも認識的可能という意味を表す。

39) a) Yağmur yağ-iyor ol-malı.
 雨 降る-PROG.GER なる-OBL

b) Yağmur yağ-mak var.
 雨 降る-INF ある
 (雨が降っているだろう。)

-mAk vā は時制にしばられず、現在進行中の出来事に関する話し手の現在の推量を表す。そして、根拠に基づく推定をする場合も話し手の不確実な推論を表現する。例40では話し手はいろいろな状況を根拠に推定し、-mAk vā 形式によって推定を表す。

40) Gozlu'da küçük ekmek dolab-ı vā.
 コズル村-LOC 小さい パン ショークース-3SG.POSS ある

Bak-tı-m iki tene ekmek gā-mış.
 見る-PST-1SG 二 個 パン 残る-PF

Di-di-m herkes ekmē-ni kendi yap-mak vā.
 言う-PST-1SG みんな パン-3SG.POSS-ACC 自分 作る-INF ある

Gocamış-lā, dede nene-lē tışā-dan al-ıyo-lā heralde.
 お年寄り-PL お爺さん お婆さん-PL 他所-ABL 買う-PROG-3PL 多分

(コズル村で小さなパンのショーケースがある。中を見たら、パンが二つ残っていた。みんなパンを自分で作っているだろうと思った。お年寄り、お爺さんお婆さんは他所から買っているだろう。)

例41では話し手は前日の夜に起きていて、家の二階に明かりが付いているのを見る。そして娘のシマイが二階にいることとライトが付いていることを根拠に、娘が起きて、明かりを点けたのかという不確実な推定をする。不確実というのは、話し手は単に推定するのみで、動作が行われた可能性があるが、確かかどうかを話し手の知識では判断できないことを表す。

41) ...yokā-nın ışığ-ı yan-ıyo di-yo-m.
上-GEN 明かり-ACC 点く-PROG 言う-PROG-1SG.

Simay di-yo-m ğāk-mak vā.

シマイ 言う-PROG-1SG 起きる-INF ある。

(2階の明かりが点いているなど思った。シマイは起きただろうと思った。)

また推定を表す大きな表現形式は-İKである。この形式は主に話し手の根拠に基づいた話し手の確実な判定を表す。-İKは過去の出来事に対して話し手の現在の推定を表し、話し手が自分の推定について自信を持っていることを示す確実性の高い表現である。共通語の-mİşと非常に似ているため、共通語話者には-İKとの置き換えが可能だと思われるようだが、二つの形式は確実性の度合いが違うため、-mİşと分けて用いられる。

42) Yukā-dan ses-lē gel-ıyo. Dada-la uyan-mış-lā.
上-ABL 声-PL 来る-PROG こども-PL 起きる-PF/EV-3PL

(二階から声が聞こえている。子供たちは起きたらしい。)

43) Baca-sı tüt-üyo bak-sana. Ev-e gel-ik-le.
煙突-3SG.POSS 煙が出る-PROG 見る-IMP 家-DAT 来る-PF/EV-3PL

(ほら見て、煙突から煙が出ているよ。彼らは家に来たに違いない。)

一方、推定を表す-mAk vāの場合、話し手の知覚による確実でない判断である。

44) İçe-den gel-en şıkırtı-ya göre ana-n bulaşık yıka-mak vā.
中-ABL 来る-PRT 音-DAT による 母-2SG.POSS 汚れた食器 洗う-INF ある

(部屋の中から聞こえてくる音からするとお母さんは食器を洗っているだろう。)

(Dirik 2016:119)

4.1.3. 想定・仮定の表現 (Assumptive)

想定や仮定を表現する場合も方言では共通語と違って-mAk vā形式が用いられる。これから起こる可能性のある事態や視覚などの判断による事態の想定を表現する場合、動詞語幹に未来形の接辞が付加されたものと組み合わせた-(y)AcAk ömak vāという述語が用いられる。

- 45) Hava pek ğaranlık. Yâmur yâ-cak ô-mak vâ.
 天気 とても 暗い 雨 降る-FUT なる-INF ある

(天気はとても暗い。雨が降るだろう。)

(Dirik 2016:121)

- 46) Tâla-ya domata ek-çek ô-mak vâ.
 畑-DAT トマト 植える-FUT なる-INF ある

Ben-den pembe domata tôm-u istem-ê gel-di.

私-DAT ピンク トマト 種-ACC 頼む-DAT 来る-PST

(畑にトマトを植えるだろう。(彼は) 私にトマトの種を頼みに来た。)

未来形の-(y)AcAkと動詞語幹の不定形が共起しないため、動詞語幹に未来形が付加された後に補助動詞ol-と-mAk vâの組み合わせが付加される。これは起こりうる出来事に関して話し手の推量・想定という主観的な態度を表す新たな文末形式となる。

4.2. サズル村方言の証拠的モダリティ

サズル村方言では、証拠的モダリティは間接的に入手した情報を伝達する報告的モダリティが、共通語と同じく-mİş/(y)mİşによって表現され、話し手の直接経験や体験による表現は-DIで表示される。一方、明らかな根拠や痕跡を元にした推定を表すには-mİşの他に-İKも用いられる。証拠的モダリティはエヴィデンシャリティとしても知られている。以下にサズル村方言に見られるエヴィデンシャリティ表現について例を挙げて説明する。

4.2.1. エヴィデンシャリティ

サズル村方言では、-İKによって話し手が出来事を目撃したか否かに焦点を絞らず、完了した出来事の結果による明らかな痕跡や、前提となる知覚による確実な推定が-İKによって示される。話し手自身の確かな認識を表現する構文について見てみると次のような例がある。例47では話し手と聞き手は結婚式のビデオを見ている。聞き手の質問に対して話し手は知覚によって推定をし、それについて確信を持って伝える。

- 47) A : Nilüfer de oyna-ma-mış düğün-de bak-sana.
 ニルフェル も 踊る-NEG-PF/EV 結婚式-LOC 見る-IMP

(見てよ。ニルフェルは結婚式で踊っていない。)

B : Herkes oyna-dı. Nilüfer de oyna-yık.

みんな 踊る-PST ニルフェル も 踊る-PF/EV

(みんな踊ったよ。ニルフェルも踊っているよ。)

例48では話し手は聞き手の声を聞いて、聴覚にもとづいて確実な推定をする。

- 48) Sen-in uyku-n gel-ik. Ses-in-den belli.
 あなた-GEN 睡眠-2SG.POSS 来る-PF/EV 声-2SG.POSS-ABL 明らか
 (あなたは眠たくなっているよ。声から分かるよ。)

例49ではBはAの質問に対して、痕跡あるいは前提となる知覚を基にして確実な推定を表現する。ここでの-İKは、前提となる知識も含めて痕跡から確実な推定を示す。この点では-mİşが表す推定とは異なる。

- 49) 文脈: (話の直前、Aの母親はかめがある場所で作業した。話をする二人はそれを直接目撃していないが、それに関する知識がある。)

A : Kim kapat-tı bu yağ küp-lē-(i)-nin āz-ı-nı?
 だれ 閉める-PST この 油 かめ-PL-3SG.POSS-GEN 口-3SG.POSS-ACC
 (誰が閉めたの、この油のかめの蓋を?)

B : E, kim ol-cak, ana-n kapa-y-ık işte.
 EXC 誰 なる-FUT 母-2SG.POSS 閉める-介入子音-PF/EV MOD
 (ま、誰であろう (お母さん以外に蓋を閉める人はいない)、お母さんが閉めたことにちがいない。)
 (Dirik and Kuribayashi 2015:125)

-İKと-mİşは推定を表す点で共通しているが、実際-İKを-mİşに置き換えると以下のように推定の度合いが異なるため、両者の例の意味が対応しないこととなる。サズル村方言では痕跡による推定は-mİşによって表示され、話し手の確実な認識を含む内容を推定したものは-İKによって表示される。

- 50) …Kim ol-acak, ana-n kapat-mış işte.
 誰 なる-FUT 母-2SG.POSS 閉める-PF/EV MOD
 (誰であろう、お母さんが閉めたようだ。)

なお、サズル村方言ではエヴィデンシャルとしての-İKと-mİşの用法と意味の違いは次のような会話でも確認できる。Aの質問に対してBは、単なる推量を表すこととなる。Aがその推量を確認するためにした質問に対し、Bは確実に言っていることを明示するために-İKを用いる。

- 51) A : Kim kapat-tı bu yağ küp-ler-i-nin ağz-ı-nı?
 誰 閉める-PST この 油 かめ-PL-3SG.POSS-GEN 口-3SG.POSS-ACC
 (誰が閉めたの、この油のかめの蓋を?)

B : E, kim ol-cak, ana-n kapat-mış işte.
 EXC 誰 なる-FUT 母-2SG.POSS 閉める-PF/EV MOD
 (ま、誰であろう (お母さん以外に蓋を閉める人はいない)、お母さんが閉めた。)

A : Emin mi-sin peki?
 確か Q-2SG そうしたら (確かなのですか。)

B : Tabi ya. Ana-n kapa-y-ık.

もちろん よ 母-2SG.POSS 閉める-介入子音-PF/EV

(もちろん。お母さんは閉めた(私は確かに思う)。)

なお、-IKには発話時以前に完了した出来事の結果とその状況を表すというアスペクト的な特徴もあり、そこから文法化が進み、過去に起こった出来事を目撃したかどうか、または明らかな知識を持つかという明確な痕跡に基づいて、話し手の確実な推定や判定を表示する。つまり話し手が「様々な痕跡に基づいているので自分の推定が確実だ」と思って自己主張したいときに、この形式が用いられる。以下の例52のように-İKは確実性を表すが、herhalde(おそらく)などの推量を表す副詞との共起も可能である。これらの副詞が付加されると確実な推定の度合いが低くなり、確実ではなくなる。上記で示したように-mİşの意味は痕跡に従う推量を表すものであり、その推量が確実か否かという点に関係していない。

52) Yâmir yağ-ık herâlde, iş-ler-i yarım bırak-ıp gē-miş-lē.

雨 降る -PF/EV おそらく 仕事-PL-ACC 中途半端 やめる -GER 来る -PF/EV-3PL

Şinci rüzgâr-la iş õ-maz di-ye de kit-me-yo-lâ.

今 風-COM 仕事 なる-NEG.AOR 言う-GER も 行く-NEG-PROG-3PL

(おそらく雨が降っただろう。仕事を中途半端にして帰ってきたらしい。今は風の中では仕事が出来ないと思って、(仕事に)行かないのだ。)

4.2.2. ミラティヴィティ

話し手が期待していなかったことや驚きを表現する時、共通語と同じく-mİş接辞が用いられる。一方、mAk vâ形式は一人称接辞と共起する場合、話し手自身の過去の行動について後で気づいたことや経験による想起への推量を表す。つまり、話し手の記憶がはっきりしないことが表示される。この場合、話し手の過去の行動に対する発見という認識を表す点で、ミラティヴィティの用法であると思われる。

53) Aa, kapı-nın iç-i-nde unut-mak vâ-yım.

ああ ドア-GEN 中-3SG.POSS-LOC 忘れる-INF ある-1SG

Getir-me-miş-im üzüm poşet-i-ni.

持ってくる-NEG-PF/EV-1SG ぶどう 袋-3SG.POSS-ACC

(あら、玄関で忘れてしまったかもしれない。ぶどうのふくろを持って来ていないらしい。)

(Dirik 2016:121)

54) Bak nē-den çık-tı. Tespih-i yastı-n alt-ı-na ğu-mak vâ-yım.

みろ どこ-ABL 出る-PST 数珠-ACC 枕-GEN 下-3SG.POSS-DAT 置く-INF ある-1SG

Nē-de di-ye ara-yıp dur-uyo-du-m.

どこ-LOC 言う-DAT 探す-GER 止まる-PROG-PST-1SG

(（数珠は）どこにあったと思う？枕の下に置いてしまっていたのだよ。どこだろうと探していた。)

5. トルコ語とサズル村方言の体系的な比較

以上、共通語とサズル村方言のモダリティ形式について記述した。共通語と方言のモダリティ体系は共通する部分も多いが、命題的モダリティに関する表現内容には大きな相違点が見られる。表2・表3は、それぞれサズル村方言と共通語の命題的モダリティの表現内容と表現手段をまとめたものである。

表2 サズル村方言の命題的モダリティの表現内容と表現手段

命題的 モダリティ	表現手段	認識的モダリティ			証拠的モダリティ	
		形態論的・分析的			形態論的のみ	
	推測	推定	想定	報告的	感覺的	
表現内容	-mAk vā	-mAk vā -IK、-mIş	-(y)AcAk ömak vā -mAk vā	-mIş/-(y)mIş	-DI,-(y)DI, -mIş /-(y)mIş, -IK	
例文番号	33,34,35, 36,37,38	39,40,41, 42,43,44	45,46	14,15	47,48,49,50,51,52	

表3 共通語の命題的モダリティの表現内容と表現手段

命題的 モダリティ	表現手段	認識的モダリティ			証拠的モダリティ	
		形態論的・分析的			形態論的手段のみ	
	推測	推定	想定	報告的	感覺的	
表現内容	-(y)AcAk, -Ar, -Dir , -mIş olabilir, -(I)yor olabilir	-mIş, -AcAk, -mAlI,-Dir, -mIş olmalı, -(I)yor olmalı, -mIş olsa gerek, -(I)yor ol-sa gerek	-(y)AcAk, -Ar, -Dir, -mIş/-(I)yor olacak	-mIş/ (y)mIş	-DI,-(y)DI, -mIş /-(y)mIş	
例文番号	10,11	4,7,9,17	3,5,6,8	14,15	16,17,19,20,21	

上記の表を見ると、共通語では認識的モダリティを表現するのに、専用の要素が-(y)AcAk / -mAlI / -Dir / -mIş olmalı / -(I)yor olmalı / -mIş olsa gerek / -(I)yor ol-sa gerek などのように数多くあり、それぞれの場面に適した接辞や分析的要素が用いられる。一方、サズル村方言では生産性の高い-mAk vā、-IK、-mIşのように三つの形式があり、様々な場面で現れる認識が主にその三つの形式によって表現されている。

6. まとめ

以上、本研究では共通トルコ語とサズル村方言のモダリティ体系について述べ、それぞれの表現手段と表現内容について明らかにした。

本研究の第一目的は、共通語のモダリティ体系を分析し、カテゴライゼーションを行うことであり、Palmer (2001) の分類を元に共通語のモダリティの表現手段と表現内容を示した。共通語のモダリティ体系において命題的モダリティの表現手段には形態論的、分析的、語彙的な手法の三つがあり、事象的モダリティにはモダリティの意味のみを持つ接辞 $-(y)Abilir, -mAII$ の形態論的な手法および名詞化接辞 $-mAk/-mA$ と $lazım$ (必要) / $gerek$ (必要) / $şart$ (義務) などの組み合わせによって表される分析的手法の二つがある。

第二の目的は方言特有のモダリティの形式を示すことであり、「 $-mAk\ vā$ 」は基本的に認識的モダリティ、「 $-IK$ 」は認識的及び証拠的モダリティの表示形式であることを明らかにし、体系の中の位置づけを行った。

第三の目的は、共通語のモダリティ体系に対し、方言の体系を明らかにすることであり、方言における事象的モダリティは共通語と同様であるが、命題的モダリティを表示する形式には大きな違いがあることを次の点で示した。

- 1) 共通語は様々なモダリティの表現手段を持つものに対して、サズル村方言では $-mAk\ vā$ および $-IK$ の述語形式があり、命題的モダリティを形成する。共通語のモダリティ体系において認識的モダリティの表現手段には形態論的、分析的、語彙的な手法があり、サズル村方言でもこれらの三つの手法によって表現される。
- 2) 共通語では推測の認識的モダリティが $-(y)AcAk, -Ar, -DIr, mİş\ ol-abil-ir / -(I)yor\ ol-abil-ir$ などの接辞によって表されるのに対し、方言ではこれらのモーダルな意味は大幅に $-mAk\ vā$ 形式によって示される。
- 3) $-mAk\ vā$ は話し手の直感的な推量とその推量の可能性という意味を含むため、いろいろな状況を前提に幅広く用いられている。しかし固定的な表現として用いられておらず、確実性の度合いはモーダル副詞によって調整される。また、根拠や痕跡に基づく推定をする場合も用いられるため、推定の表現として位置づけられる。 $-mAk\ vā$ は時制の制約がなく、現在得られる過去の出来事の痕跡を元に話し手の現在への推量を表すものである。この場合は単に話し手の主観的態度を表すため、エヴィデンシャリティというよりも認識的モダリティ専用の表示形式だと思われる。
- 4) 想定の場合、共通語では形態論的手法と分析的手法の両方があるのに対して、方言では $-mAk\ vā$ の分析的形式のみである。未来への想定は $-AcAk\ ömak\ vā$ という形式によって表される。
- 5) $-IK$ は話し手の推定が真である可能性が高いつまり確実という点で認識的モダリティを表すが、話し手が明らかな痕跡によって確実な推定をするという点でエヴィデンシャリティを明示する

と思われる。

- 6) 共通語では感覚的な証拠を元にした推定を表すエヴィデンシャルティ表現は -DI と -mİş であるが、方言は直接経験の場合 -DI、間接的証拠に基づく表現形式は確実性が高い場合は -IK、確実性などに関係ない場合は -mİş を用いる。
- 7) 話し手が予期していなかったことや驚きを表現するミラティヴィティは共通語でもサズル村方言でも同じ -mİş 接辞で表示される。一方、-mAk vā 形式は一人称と共起する場合、話し手自身の過去の行動について、話し手が後で気づいたことや経験による想起への推量を表す。話し手の過去の行動に対する発見という認識を表す点ではミラティヴィティの用法であると思われる。

以上、方言と共通語のモダリティ体系の対比を行った上で、上記の点が明らかにした。本研究は方言と共通語の文法要素の関係に関する成果の一つとして、トルコ語の方言研究に貢献することを目指したものである。

略記号

ABL : 奪格、ACC : 対格、ADJ : 形容詞、AOR : 中立形、COM : 共格、COND : 条件/仮定、CONJ : 接続詞、COP : コピュラ、CV : 副動詞、DAT : 与格、EXC : 感嘆、EV : 証拠性、FUT : 未来、GEN : 属格、GER : 動名詞、GM : 述語マーカー-Dİr、INF : 不定形、LOC : 位置、MIR : ミラティヴィティ、MOD : モダリティ、NEG : 否定、OBL : 義務、OPT : 願望、PF : 完了・パーフェクト、POSS : 所有、PROG : 進行、PRT : 分詞、PST : 過去形、PSB : 可能、STA : 状態アスペクト、Q : 疑問、VOL : 意志、SG : 単数、PL : 複数、1 : 1人称、2 : 2人称、3 : 3人称

参考文献

- AIKHENVALD, Y. Alexandra (2004) *Evidentiality*. Oxford University Press.
- AKSU-KOÇ, Ayhan (1988) *The Acquisition of Aspect and Modality: The Case of Past Reference in Turkish*. Cambridge University Press.
- BULUT, Serdar (2013) “Türkiye Türkçesi Ağzıları Üzerine Çalışma Yapılmayan İl ve İlçeler”, *Turkish Studies*. Volume 8/1 Winter 2013, s.1129-1149.
- DİRİK, Seval (2016) “Çanakkale (Sazlı Köyü/Ayvacık) Ağzılarında Bir Kiplik Şekli: -mAk vā” *Dil Araştırmaları*, Güz 2016/19 :111-123.
- DİRİK, Seval and KURIBAYASHI, Yuu (2015) “Sazlı Köyü (Ayvacık/Çanakkale) Ağzında Görülen (y)IK eki ve İşlevi”, *Dil Araştırmaları*, Güz/17:119-134.
- ERGİN, Muharrem (2013) *Türk Dil Bilgisi*. İstanbul: Bayrak Basım.
- GÖKSEL, Aslı and KERSLAKE, Celia (2005) *Turkish: A Comprehensive Grammar*. New

York:Routledge .

HENGİR MEN, Mehmet (2007) *Türkçe Dil Bilgisi*. Ankara:Engin Yaymevi, p.307.

KARAHAN, Leyla (2011) *Anadolu Ağzlarının Sınıflandırılması*. Ankara: Türk Dil Kurumu.

KERİMOĞLU, Caner (2011) *Kiplik İncelemeleri ve Türkçe*. İzmir: Dinozor Kitabevi.

KORNFILT, Jaklin (1997) *Turkish: Descriptive Grammars*. London: Routledge, p.366-390

PALMER, F. R. (2001) *Mood and Modality (2nd edition)*. New York: Cambridge University Press.

UZUN, Nadir Engin (1998) “Türkçede Görünüş/Kip/Zaman Üçlüsü” *Dil Dergisi*,68:5-22

林徹 (2013) 『トルコ語文法ハンドブック』 東京：白水社.

風間伸次郎 (2011) 「[テーマ企画：特集モダリティ]まえがき」『言語学研究所論集』第16号
p.29-55, 東京外国語大学.

工藤真由美 (2006) 「アスペクト・テンス」小林陸(編)『シリーズ方言学 2 方言の文法』
東京：岩波書店.

